



「全国学力・学習状況調査の千葉県の結果」を基に、自校の結果を改めて振り返り、全職員で共通理解を図りながら、授業改善・学力向上に向けた取組を検討してみましょう。

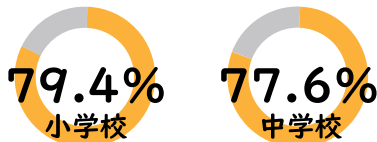
主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

(円グラフの数値は肯定的回答の割合)

① 主体的な課題解決に関する取組状況

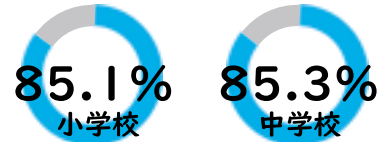
児童生徒質問

授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。



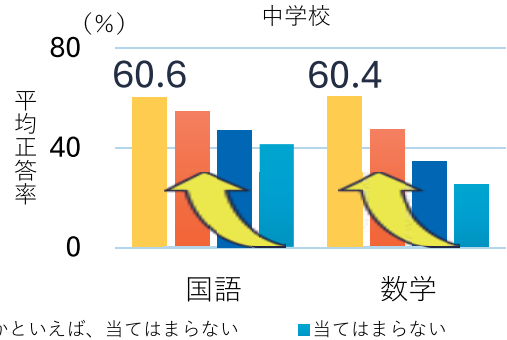
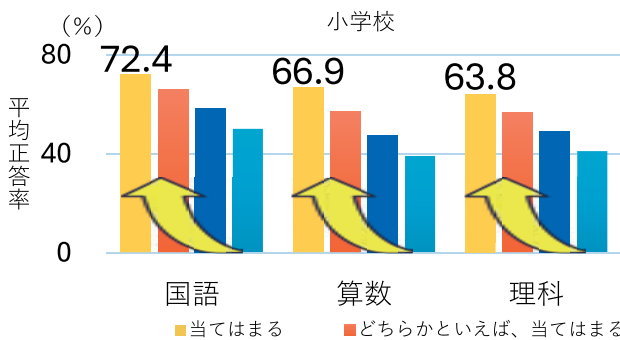
学校質問

授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。



主体的・対話的で深い学び（主体的な課題解決）
× 各教科の平均正答率

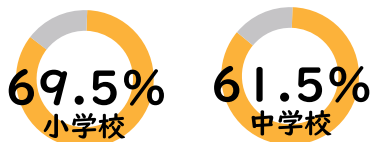
課題の解決に向けて自分で考え、取り組むほど平均正答率が高い傾向にあることから、子供たちが課題を見だし、解決する授業展開を計画する必要がある。



② 発表・プレゼンテーションに関する取組状況

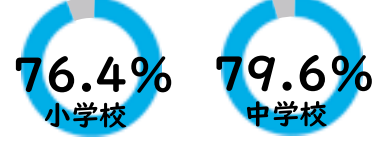
児童生徒質問

授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発表していましたか。



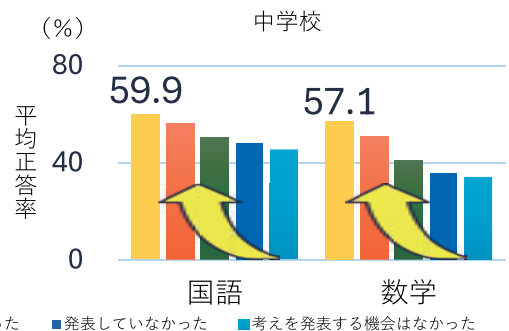
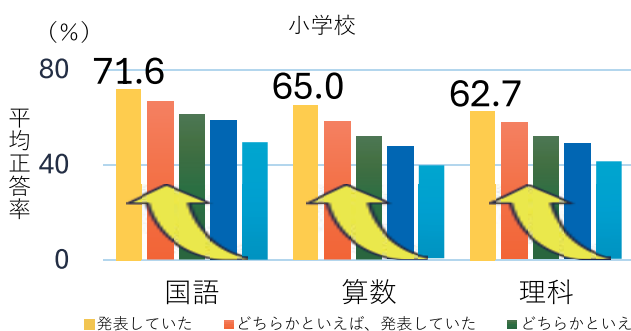
学校質問

授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。



主体的・対話的で深い学び（自分の考えを発表）
× 各教科の平均正答率

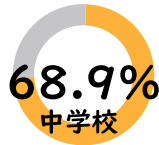
自分の考えを発表している児童生徒ほど平均正答率が高いことから、対話や発表の場面を計画的に設定することが大切である。



③教科等横断・まとめる活動に関する取組状況

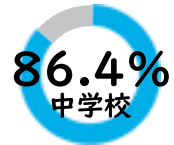
児童生徒質問

授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか。



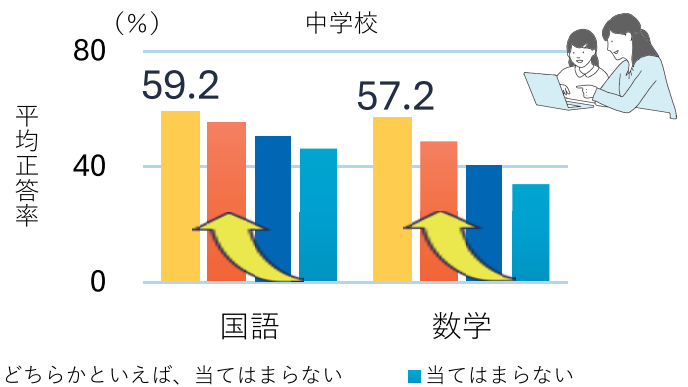
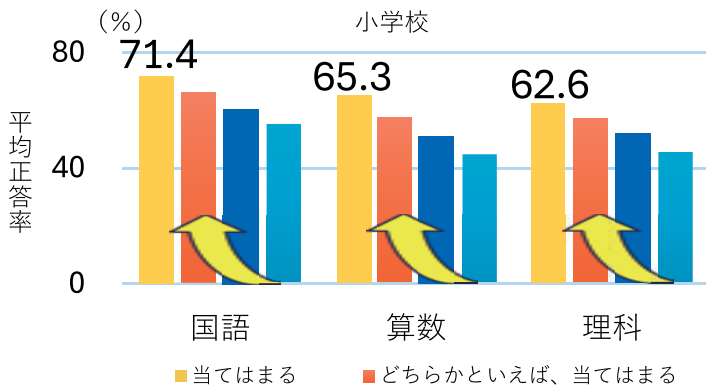
学校質問

授業において、児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れましたか。



学びを生かして、まとめる活動
×各教科の平均正答率

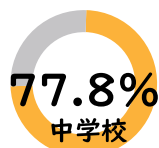
自分の考えをまとめる活動を行うほど平均正答率が高いことから、振り返りを自分の言葉で書く時間を設定することが大切である。



④個別最適な学びに関する取組状況

児童生徒質問

授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか。



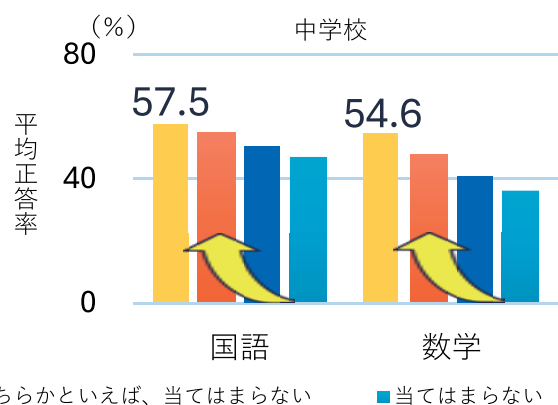
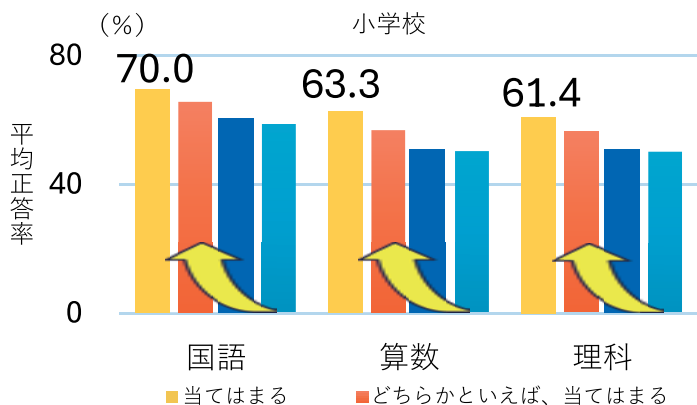
学校質問

学習指導において、児童生徒一人一人に応じて、学習課題や活動を工夫しましたか。



個別最適な学び×各教科の平均正答率

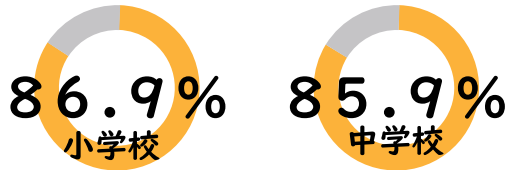
自分にあった学習が展開されているほど平均正答率が高いことから、ICT等を活用した個別最適な学びの時間を確保することが大切である。



自己有用感

児童生徒質問

自分には、よいところがあると思いますか。



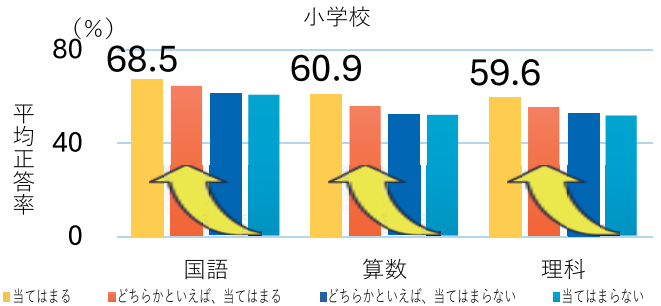
児童生徒質問

先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。

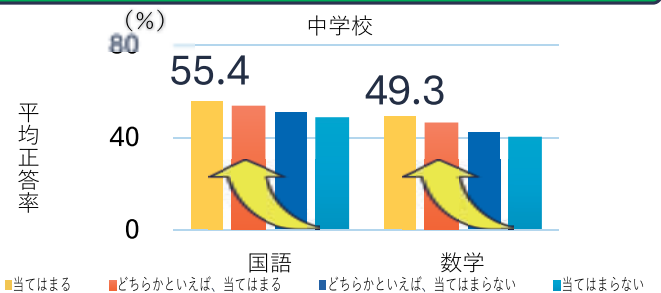


自己有用感×各教科の平均正答率

自己有用感の高い児童生徒ほど平均正答率が高いことから、教育活動全体で友達同士での認め合い活動などを工夫することが大切である。



先生に認められていると感じている児童生徒ほど平均正答率が高いことから、一人一人をよく見た日々の声掛けが大切である。



児童生徒質問の「自分には、よいところがあると思う」と「先生は、あなたのよいところを認めてくれている」の回答には相関性が見られています。調査結果を振り返る1つのポイントとして確認してみましょう。

参考：令和7年度全国学力・学習状況調査活用の手引 P44（千葉県総合教育センター作成）



幸福感等

児童生徒質問

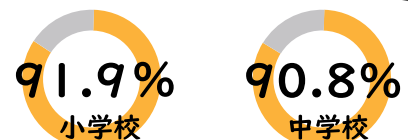
学校に行くのは楽しいと思いますか。



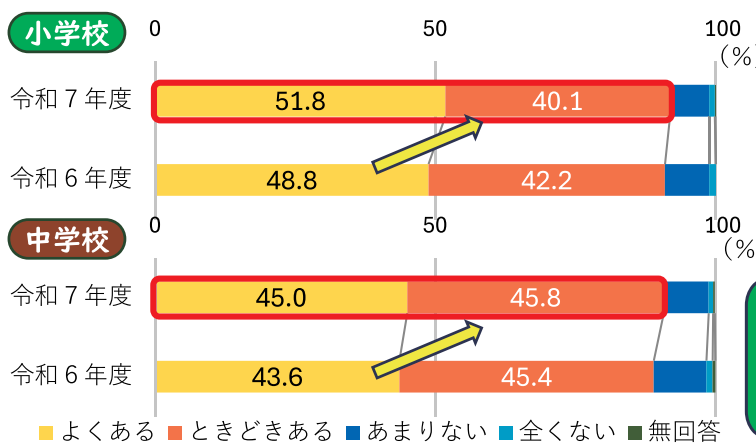
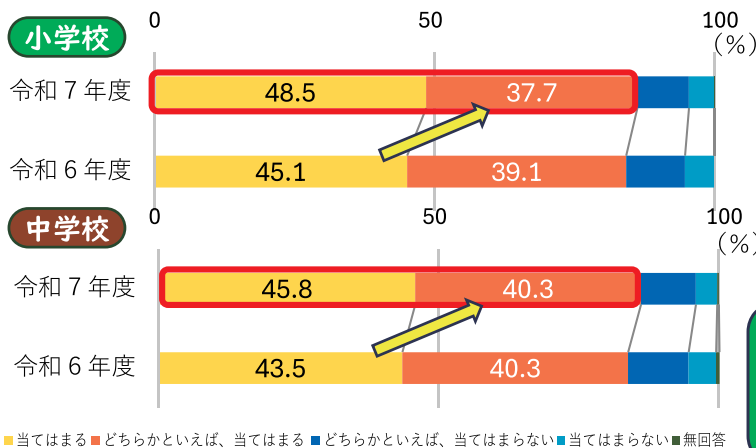
「学校に行くのは楽しいと思う」と肯定的回答をした児童生徒の割合は、昨年度と比較すると、小学校で2.0ポイント、中学校で2.3ポイント高い。子供たちがより一層安心して学校生活を過ごすことができるよう、日々の声掛けが大切である。

児童生徒質問

普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか。



「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることがある」と肯定的回答をした児童生徒の割合は、昨年度と比較すると、小学校で0.9ポイント、中学校で1.8ポイント高い。子供たちのニーズに応じた、充実した学校生活が1つの要因であると考えられる。



学習面だけでなく、生活面も含めた様々な場面での先生方のサポートが、児童生徒の自己有用感や幸福感等の向上に寄与しているといえます。先生方の日々の取組に感謝いたします。

これからも子供たち一人一人の自己肯定感や自信を深めていけるように、「チーム千葉」として、ともに千葉の子供たちの未来を創っていきましょう。

授業改善のポイントと

授業実践アイデア例



令和7年度に発行された「千葉県学力向上通信COMPASS」には、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善のポイントと授業実践アイデア例をいくつも紹介しています。

小学校・国語

「聞かせて！あなたの推し！！」

- ①学習意欲を高める「話題」の設定
- ②インタビューで具体的な情報を引き出す実践例の提示



中学校・国語

「それって本当に正しい？～自分の視点で深掘り発信！～」

- ①表現の工夫について友達と助言し合う場面の設定
- ②聞き手を参加型にする工夫



小学校・算数

「もとにする数に着目して問題を解決する学習」

- ①分数の考え方のポイント
- ②友達と互いに学び合う場面の設定



中学校・数学

「日常的な事象における問題について、関数関係に着目し構想を立て解決する学習」

- ①生徒自身が問いを見いだす工夫
- ②対話的・協働的な活動の設定



小学校・理科

「土地のつくりと変化」

- ①単元の見通しの共有
- ②次時の課題につなげる工夫



中学校・理科

令和7年度 全国学力・学習状況調査
報告書【中学校／理科】（参考資料）
文部科学省 国立教育政策研究所

- ①仮説の設定
- ②探究から生じた新たな疑問などに着目した振り返り



単元計画や授業計画に意図的・計画的に「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」の4つの過程を位置付けるとともに、千葉県が課題とする記述力向上に向けて、先生方も具体的な指導内容を検討してみましょう。



千葉県の授業改善「キーワード」

「自分の言葉で学習のまとめを書く」に関するポイント

- 1 主体的に学習に取り組む態度の育成
○子供たちが「ねばり強く」「自己調整」しながら学習できるよう、単元のはじめに「身に付ける資質・能力」「評価方法」を全体で共有する。
- 2 子供たちが「その時間（単元）の目標」を意識
○本時のねらいや分かったことを日常でどう生かすのかを意識して書く。
- 3 学習課題に対する考察としてのまとめ
○「分かった」「おもしろかった」等の感想ではなく、「本時のねらい」にせまるキーワードを使って、自分の言葉で学習をまとめる。

全国学力・学習状況調査から見た 課題への改善の方策



県内の学校から

【「書く」力を高める指導方法】

日々の授業において、まとめを自分の言葉で書けるように指導し、日々児童の言葉で記述をする習慣をつけさせる。

(野田市立北部小学校)

教員の授業改善に努める。特に「書く・話す」活動の充実を図る。そのために、展開ではグループ活動を取り入れ、授業終わりに振り返りを80字でまとめる「R80」の取組を推進する。

(成田市立吾妻中学校)

国語については、一人一台端末の活用と、手書きで自分の考えを記述する時間の確保とのバランスを取るようにする。特に、基礎基本の定着を図る低学年のうちに、手書きの経験を多く積ませる。

(船橋市立西海神小学校)

思考力・表現力の育成のため、時間を意識した要約活動(タイマートレーニング)を導入し、情報処理速度を高める。スモールステップ方式や、生徒間の相互評価を取り入れ、書くことへのハードルを下げる。

(船橋市立海神中学校)

【基礎・基本の定着】

算数において、一人一人のニーズに合わせた支援体制を構築する。担任と少人数指導教員で授業の前後には必ず情報交換を行い、児童の個々の様子を把握し、授業ごとの成果と課題を確認する。

(神崎町立神崎小学校)

千葉県公立高等学校入学者選抜における「思考力を問う問題」のサンプル問題や「ちばのやる気学習ガイド」を活用し、基礎・基本の徹底を目指すとともに、「自分の考えを書くこと」に慣れ、自己表現することに自信を持たせるように指導する。

(木更津市立金田中学校)

【ICTの活用】

本校で作成している「学年別ICT活用スキル一覧」の各学年の達成目標を年度初めに確認し、計画的に取り組むことで、確実に目標を達成させていく。

(習志野市立向山小学校)



GIGAスクール通信



L-gateアプリやMEXCBTの有効な活用法の検討や、Canva等を用いた生徒のプレゼンテーションスキルの向上について研修を充実させる。

(茂原市立早野中学校)

学力向上に効果があった事例

～授業者と授業補助者の連携による効果的な指導方法～

同一教室内での習熟度別授業の実施 ～「個別最適な学び」の創出～

教室内で習熟度別に分け、授業者と授業補助者（補助者）が児童生徒の実態に合わせた個別最適な学びを実施する。

【事前準備】

- ①補助者がいる時間に単元末の演習やドリルを解いて定着を図る授業を計画する。
- ②授業者と補助者で、下位層と中・上位層の指導する分担を決めておく。
- ③レベル別（難易度別）問題を用意する。（プリント・タブレット等）

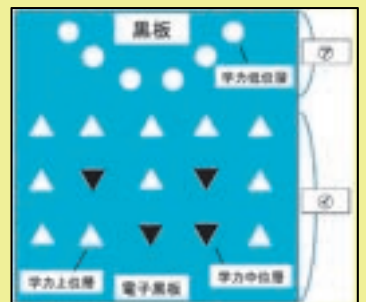
【授業展開】例：小学校算数〈役割：★授業者 ☆補助者〉

- ★①授業者が、単元の振り返りや既習事項について指導（一斉指導）
→定着させたいポイントや解法を短時間で指導
- ②児童生徒は、レベル別（難易度別）問題を解く
- ★③授業者が、**つまずいている児童生徒を教室の前に**集めて指導（個別指導）【図1ア】
→黒板を活用し、少人数で定着を図る指導
※児童生徒が「わからない!」とつまずきを表現できるような普段からの人間関係の構築や環境づくりが重要!
- ④他の児童生徒は引き続き、レベル別課題に取り組み、**廊下に掲示した解答で自己採点**
※一人で机で採点するのではなく、廊下で採点しながら「なぜ?」の声に対して、**友達との学び合いが自然に発生する。**
※複数個所に掲示することで、混雑を解消できる。
→ **正解者：次のレベルの問題に取り組む（上位層を放っておかない工夫）**
☆ **不正解者：補助者へ質問し、解説を受ける（きめ細かな指導）**
- ☆ ※不正解者が多い場合は、**授業補助者が教室後方で電子黒板を使って指導**【図1イ】
※**レベル別問題の実施と授業補助者の机間指導等**により、個別に学習を進められる。

【指導の効果】

- ・レベル別課題を用意することで、下位層と中・上位層それぞれに**個別最適な支援**を行うことができる。
- ・丸付けや次の指示を待つ児童生徒が一人もない。
- ・指導者が複数いることで、2分の1の時間で採点や確認が可能。
そこで捻出した**余剰時間をどう活用**するのか予め想定し、準備しておくことが学力向上に繋がる。

【図1】



授業補助（TT）がある日の授業を、ただ授業を進め、補助者がつまずいている時にだけ支援に入るのではなく、単元内容や児童生徒の実態に合わせてどのように進めるか**事前に計画し、個別最適な学びが行えるよう準備と打ち合わせをすることが大切です。**

同一教室内での学習内容が異なる授業の実施

【図2】

同一の教室内で生徒を前方と後方に分け、授業者と補助者が実態に合わせてそれぞれ異なる内容を指導する。

【授業展開】例：中学校英語〈役割：★授業者 ☆補助者〉

- ①**生徒が理解度によってそれぞれ取り組む内容を決め**、2つに分かれる。【図2】
- ☆②教室前方で補助者が黒板を使用し、解説やプリント等で文法の定着を図る。
- ★③教室後方で授業者が電子黒板を使用し、writing（英作文）に取り組む。
- ④授業終了後、選択していない内容のプリントを共有して取り組む。
※補助者がもう1名いる場合は、**教室全体を机間巡視し、きめ細かな指導を行う。**
※補助者は事前にプリント内容と解答を理解しておくことで、素早い支援に入れる。

